

～ 口蹄疫の現場から ～

厳しい環境の中の必死の防疫作業

独立行政法人家畜改良センター茨城牧場 齊藤政宏

私は、5月半ばに1週間、防疫作業のため宮崎県に派遣されました。

川南町役場内の現地対策本部に着いてみると、日本中から数多くの獣医師や畜産技術者が応援に来ており、驚かされました。中には機関の長など地位の高い年配の方もおられ、一兵卒として若い技術者に混じって懸命に作業にあたる姿は、とても印象的でした。緊急事態に一丸となって立ち向かう我が国畜産関係者の強い絆を感じました。

私は、発生農場で豚や牛の薬殺等を担当しましたが、このような大規模の殺処分など経験がありません。まん延防止のためとはいえ、やりきれなさも感じました。

農場での防疫作業は、猛暑の中、厚い防疫服や厳重な防護具を着用し、悪臭・ほこりの中、足下不安定な劣悪な環境で行われました。

このような中、事故も発生しました。私は、殺処分のための薬が目に入るという事故に遭いましたが、幸いすぐに処置したため大事には至りませんでした。しかし、私の知人は、消毒薬による重度の化学火傷のために活動を続けることができず、宮崎を離れることとなってしまいました。

このように皆が必死に防疫作業に取り組んだにもかかわらず、新たな感染農場が見つかる日が続

きました。

私は、私を快く送り出してくれた家族や職場の仲間達のためにも、終息への道筋が見える状況で帰りたかったのですが、叶いませんでした。

宮崎を離れる直前、宮崎県庁前で、「ウシさんたち、ブタさんたちを助けてくださ～い!!」と氣勢をあげ、口蹄疫対策を訴える地元の幼稚園児達に会いました。志半ばで帰る私は、子供たちの声に元気づけられました。

その後、ワクチンが応用され、口蹄疫は終息に向かいました。

私は、悲惨な防疫現場を経験して、二度とこのような惨劇が繰り返されてはならないと強く感じました。

